
最後の一言。

奥田徹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の一言。

【Nコード】

N4513BA

【作者名】

奥田徹

【あらすじ】

最後の一言が見つからない。彼は悩み、探した。インチキ占い師の兄が「占ってやろうか？」と言った。

彼は最後の一言を何にするか、ずっと考えていた。

一年前から身辺整理をし、要らないものを捨て、疎遠だった人に会いに行き、時間をかけて食べたいものを食べるに出向いた。

「随分と羽振りが良いじゃない？」

「うん、貯金を降ろしたんだ。」

「どうしてまた？」

「確認だよ」

「確認？」

「まだ胸が高鳴るのか、それが知りたいんだ。」

「ほう…何かいいな、それ」

「うん、悪くないよ。」

彼は死の宣告を受けた訳でも、何かに絶望した訳でも無い。ただ、ある日突然、自らの「停止」を感じたのだ。

それは本当に唐突だった。場所は銀座の中央区四丁目。ビルとビルの間にあつた鉄扉を間違え、中へ入った時だ。そこは避難通路で行き止まりになっていた。

「間違えた…」と、一言小さく呟いたと思うと、激しい寒気と、嘔吐感が襲い、動けなくなった。

その避難通路でうずくまりながら、彼は「間違えた」事実を知る。そう、どこからか「全て間違えていた」のだと。

吐き気に従い吐こうとするが、何も吐き出されず、全身の寒気にごう対処して良いか解らず、

「助けて…助けて…」と霧のようにかすれた声で叫んでみたが、それは誰にも気づかれる事ないまま。

いつしか眠りに入り、目を覚ました時には「停止」していた。

道を間違え、声は届かず、停止する。

それは彼にとってこれまで過ごしてきた人生の縮図にさえ思えた。

「結局はそう言う事だった。」

彼には占い師の兄がいた。だけど兄は基本的に占いを信じていなかった。

「最近さ、占いだけじゃ弱いから、お告げが下りて来るのも付け加えて、別料金にしたんだ。」

「バチ当たるよ。」

「んな訳ないだろ」

と言って兄は笑った。

「お前も見てやろうか？」

「考えとく。」

兄は当たると評判で、連日列が出来る程の人気だった。

彼は兄の事が好きだった。「人生、気取ってたってしょうがないんだ。」と、兄は彼に諭す様によく言った。たまにその意味を考えた。気取るって、どういう事なんだろう。

「停止した」等という自分は他人から見たら気取った奴に見えるのかもしれないなと彼は考えた。しかし、それはどうする事も出来ない仕方の無い事だった。彼は「停止」を感じてしまい、事実としていつまでも動き出さず、これから先は奪れ続け、気持ちの高鳴りを感じる事を拒否されていたのだから。

まだ小さい頃、彼は兄と二人でバスを乗り継ぎ、街へ出た事がある。「おれら、小さいからバス代タダなんだぜ。」

知らない街を二人で歩きながら、目の前の道をただ曲がったり、戻ったり、くぐり抜けたりしていたら、当然の如く迷子になった。

「どうするの？」

「わからないけど、だいじょうぶだよ。」

兄はそう言うとはとなく、もと来た様な道をまた適当に進んでいった。

その間、彼は家に帰る事は一生出来ないのでは無いかと考えていた。不安になり、親を思い出し、その時味わう初めての感情に戸惑って泣いた。

夜になり、暗くなり、足も疲れ、彼も泣きつかれ、お金も無い時、コンビニの前で座っていた二人は、大人に声をかけられ、交番に連れていかれ、最終的に家に戻る事が出来た。

その時兄は「だろ？」と言って笑った。

「最後の一言が決まらない。」

このまま停止が続くのであれば、せめて何か一言、僕なりの痕跡の様な物を残したいと、彼は思った。

それは、悔いが残らぬよう、自分が言い切ったと思える最後の一言。

その言葉が見つからない。胸は高鳴らない。身体の衰えが精神に響き、

「もう、いいか…。」

と、呟いた時、彼はハツとした。見るとそこは、銀座の行き止まりで彼が間違え、停止した場所だった。

高熱にやられ、歩いた記憶も無く、家に辿り着いた様な感覚。朦朧とした意識の中、今までの行動が夢であったかの様に、記憶が断片となり散らばり、

「結局、何も出来なかった…。」と、虚しさが押し寄せる。何がしたいのかさえ解らなかった。確認作業、最後の一言、何を言っていたのだろう。気取ってたのだろうか。

彼はそこでまた記憶が途絶えた。

寝室で目を覚ました時、傍らにいたのは兄だった。

彼の手を握り、ジッと眺めていた。

「…何してるの?」

「ん?手相を見てやってる。お前の。」

「何て出てる?」

「そうだな。考え過ぎなところがあるから、気を楽しめた方が良いな。」

「最後の一言が決まらないんだ。」

「最後の一言?」

「ずっと考えてる。それが決まらなければ、停止したままだし、終われもしない。そんな気がするんだ。」

「最後の一言か…よし、天に聞いてしんぜよう」

と言って兄は、片手を天に伸ばした。

「インチキなんだろう？」

「インチキだよ。でも、当たるって評判なんだ。」

そう、答えながら兄は目をつぶり、スーっと小さな音を出しながら息を吐いた。

「来た！」

「……。」

「最後の一言、それは……」

「……。」

「最後になつたら考える…だそうだ。」

「は？」

「まだ、最後じゃないって事らしいね」

「何だよそれ。」

「ちなみに、カレーを食べるとパワーが出るらしいぞ。トッピングは唐揚げ二つ。」

「嘘臭っ」

「案外当たるんだ。行くぞ！」

「何処へ？」

「カレー食いに。」

兄の言葉を聞き、彼は微笑んだ。

「ありがとう。」

「どうだ俺の占い？」

「インチキとは思えない。」

「インチキだろうが元気を出せ。それで良いじゃねえか。」

兄はそう言うと、

「だろ？」と言って笑った。

彼は少し胸が高鳴った様な気がした。

後じゃないって事らしいね…」

「何だよそれ。」

「ちなみに、カレーを食べるとパワーが出るらしいぞ。トッピングは唐揚げ二つ。」

「嘘臭っ」

「案外当たるんだ。行くぞ！」

「何処へ？」

「カレー食いに。」

兄の言葉を聞き、彼は微笑んだ。

「ありがとう。」

少し胸が高鳴った様な気がした。

「どうだ俺の占い？」

「インチキとは思えない。」

「インチキだろうが元気を出せ。それで良いじゃねえか。」

兄はそう言つと、

「だろ？」と言つて笑つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4513ba/>

最後の一言。

2012年1月12日03時45分発行